

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第9巻 女性と文明

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008559

女性と文明



本書は、梅棹忠夫の女性、家族・家庭、家事・家政にかんする論稿の集大成である。梅棹は世界各地の家族や女性の生活を調査しながらも、日本社会にも関心を向け、その予見も交えた議論を積極的に展開してきた。しかもそこには彼の情報論、知的生産の技術論などの視点も加えられ、アカデミズムを超えた反響を呼んだ。本書は、その反響への応答も含めた梅棹の思索プロセスが自ずと浮かび上がるように構成されている。

本書で最も特筆すべきは、論稿の多くが一九五〇年代後半から六〇年代にかけて発表されたものであるにもかかわらず、なんなら古さを感じさせないことだろう。たとえば一九五九年の「妻無用論」は発表当時大きな話題となり、その後、上野千鶴子（「主婦論争を読む」一九八二年）によって日本の女性論の歴史に的確に位置づけられたが、発表から半世紀たった今も十分に刺激的である。それは、日本の状況が実はあまり変化していないということよりも、むしろ、梅棹の観察力と分析力の見事さの証である。日本の家族や女性にかんして本書の随所に記されている彼の予測が、ほとんど外れていないことも驚きである。

その議論を支えているのは、女性や家族についてもモノや技術などのインフラを含めたシステムとして考えようとする視点そして、現在起きている問題も長い過去をもち未来に向かう文明史の中で考察していこうとする視点など、一言でいえば、広大な視野と知見に裏打ちされた、徹底した相対主義である。昨今の専門分化される傾向の強い文化人類学・民族学にとって学ぶべき点は少なくない。

また、だからこそ梅棹は、ジェンダー研究という分野が生まれる前から、女性や家族の問題が近代化の産物の一つであることを喝破し、それゆえ彼としてはごく自然に、この問題に取り組んできたのであろう。その意味で本書は、梅棹の研究姿勢の魅力と意義を感得することのできる好著でもある。女性や家族問題に関心を持つ方だけでなく、一人でも多くの方にぜひ一読をお勧めしたい。（宇田川妙子）